

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：64302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07427

研究課題名(和文) 戦前期日本音楽療法実践の実像 松沢病院所蔵資料「病者慰安書類綴」を中心に

研究課題名(英文) The True Story of the Practice of Music Therapy in Prewar Japan: Mainly Based on the 'Byosha ian shorui tsuzuri' (Documents on Consolation of Patients), Collection of the Matsuzawa Hospital

研究代表者

光平 有希 (MITSUHIRA, Yuki)

国際日本文化研究センター・研究部・機関研究員

研究者番号：20778675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦前期日本音楽療法実践の独自性について、東京都立松沢病院に現存する音楽療法実践記録書「病者慰安書類綴」を中心として、調査分析を行った。その結果、戦前期の松沢病院では、精神療法・作業療法の一環として、患者が楽器を演奏する「能動的音楽療法」と、楽曲・演芸・映画などを鑑賞する「受動的音楽療法」が継続的に行われていたことが判明した。具体的な音楽療法では、患者の文化土壌や趣味嗜好に合わせた楽器や楽曲が用いられ、刺激的な音色や歌詞などを排する傾向が認められた。さらに、松沢病院を中心としつつ、明治期から昭和戦前期にかけて、各地の精神病院では音楽療法実践が広がっていったことも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In order to grasp the distinctive nature of the practice of Japanese music therapy during the pre-war period, this study surveys and analyses existing music therapy treatment records at the Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital, focusing on the compilation 'Byosha ian shorui tsuzuri'. The research found that 'Active music therapy' and 'Passive music therapy' were continually ongoing at the Matsuzawa Hospital during the pre-war period as part of psychotherapy and occupational therapy overall. The study found that during music therapy, instruments and music were chosen so as to match the patients' cultural backgrounds and tastes, and that there was a tendency to avoid stimulating tones and lyrics. While the scope of the study was limited to music therapy in Matsuzawa Hospital, the study resulted in demonstrating that the practice of music therapy was spreading among psychiatric hospitals in Japan from the late nineteenth century to up to the pre-war years.

研究分野：音楽療法史

キーワード：音楽療法 近代日本精神医学 松沢病院 病者慰安書類綴

1. 研究開始当初の背景

現在、日本における音楽療法分野では、実践に重きを置いての研究が大半であり、その基盤である原理研究や歴史の変遷過程を辿る研究には、まだあまり目が向いていない。とりわけ、戦前期の日本における音楽療法に関する研究は、極めて少ない現状にある。

このように、音楽療法史研究が発展途上である今日、日本における音楽療法は、1950年代以降の昭和後期から、アメリカなどの西洋音楽療法を模倣することによって始まったとの誤った見解が主流となっている。

しかし、申請者の研究により、日本音楽療法思想は、江戸期養生論の中で体系的に論じられるようになり、西洋思想が流入する明治期に転換期を迎えることがこれまでに判明している。また、西洋音楽療法思想を受容する際、日本人は原形思想のまま受け入れたのではなく、明治前期には、江戸期の思想を基盤とした和漢洋折衷の音楽療法思想の形成を試みていた。そして、明治後期には、西洋の精神医療を直接学んだ精神科医の呉秀三によって、現・東京都立松沢病院（前：巢鴨病院）で音楽療法実践が行われるに至った。

つまり、それまで書籍、雑誌、新聞などで理論のみが紹介される「思想」への言及に留まっていた音楽療法が、すでに明治後期には、科学的根拠を持った「実践」として実際の医療現場で用いられるようになっていたのである。

明治期より音楽療法実践を行い、また、本研究で中心的に取り上げた東京都立松沢病院は、現存する日本最古の精神病院であり、長きに亘り日本における精神科医療を牽引してきた。その松沢病院では、治療の一環として音楽を用いる音楽療法が、明治35（1902）年より継続的に施行され、それらの様子は、病院年報や音楽療法実践記録書、各患者の症例誌などの病院側資料に細かく採録されている。

しかしながら、前述した資料は現存するものの、残念ながらこれまで本格的な調査研究の対象にはなっていない。したがって、本研究開始以前には、戦前期の松沢病院でどのような音楽療法が実際に行われていたのか、その全容が解明されることはなかった。

2. 研究の目的

本研究は、松沢病院の音楽療法実践期間の中でも、主として戦前期に著わされた「病者慰安書類綴」という音楽療法実践記録書に焦点を当てながら、以下の順で考察を深めていった。

(1) 未公開資料「病者慰安書類綴」の内容を翻刻する。

(2) 「病者慰安書類綴」における各会の内容を、項目別に分類すると同時に、音楽療法実践に関連する情報を網羅的に収集し、総合的な音楽療法実践に関するデータベースを構築する。

(3) (2) で作成したデータベースを基に、松沢病院における音楽療法実践内容を分析・解明する。

(4) 松沢病院における音楽療法実践の模範とされたフンボルト大学シャリテ附属病院の音楽療法実践内容との比較分析により、松沢病院における音楽療法の独自性を解明する。

上記4点の調査分析結果をもとに、本研究では、戦前期松沢病院における音楽療法実践内容、及び独自性を解明し、戦前期日本音楽療法の様相を、松沢病院の音楽療法実践内容を中心として明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

平成28年度・29年度に行った研究の方法は以下のとおりである。

(1) 平成28年度は、まず2冊の「病者慰安書類綴」に記載されている内容の翻刻作業を行った。次いで、翻刻した「病者慰安書類綴」の内容に基づき、当時の音楽療法に関連する画像・文献史料を収集した。

その上で、「病者慰安書類綴」の第1分冊に記載されている音楽療法実践内容を、「日時」「場所」「人数」「患者の性別」「演奏曲目」「演奏時間」にそれぞれ分類した。

さらに、各会の状況を窺い知ることのできるその他の資料があったものに関しては「実践時の様子」「実践後の様子」といった内容項目を追加し、音楽療法実践に関するデータベースの基礎を構築した。

また、平成28年度は、上記の作業を通じて研究基盤の構築を図ると同時に、翻刻内容に関しては対象患者及び関係者の名前等の個人情報を完全に伏せた形で、特徴ある音楽療法実践内容を抜粋し、分析を試みた。

(2) 平成29年度は、まず2冊の「病者慰安書類綴」に記載されている内容を主軸とした音楽療法実践に関するデータベースを完成させた。

その後、同データベースを基に、症例と演奏曲目との相関性、演奏曲目種別及び対象患者の推移、音楽療法による効果や性別分類の動向等、多角面から松沢病院で行われていた音楽療法実践の内容実態を分析した。

さらに、松沢病院が音楽療法実践の模範としたフンボルト大学シャリテ附属病院の音楽療法実践と、データ分析によって抽出した松沢病院における音楽療法実践内容との比較分析を行い、松沢病院で行われていた音楽療法の特徴を解明した。

そして最後に、上記の各分析結果を基にして、松沢病院における音楽療法実践の独自性の検証、さらに松沢病院における音楽療法実践が同時代の日本音楽療法に与えた影響についても考察を行った。

4. 研究成果

本研究における考察の結果、大きく以下の3点が明らかとなった。

(1) 戦前期の松沢病院では、精神療法、及び作業療法の一環として、患者が自ら楽器を演奏して効果を見込む「能動的音楽療法」と、楽曲・演芸・映画などを鑑賞することによって効果を見込む「受動的音楽療法」という2種類の音楽療法が行われていたことが判明した。

なお、とりわけ「受動的音楽療法」の実践に際しては、各患者の症状を考慮した上で、音楽による感情への「同化」「発散」「転導」という流れを考慮した一定のメソッドが意識的に導入され、医療関係者によって継続的に音楽療法実践が行われていたことも明らかとなった。

また、音楽療法実践の内容及びその場の状況、患者の反応、さらには準備段階に関連する事項に至るまで、音楽療法実践に関わる事柄については、細かく病院側資料に記録として残されていた。このことから、戦前期の松沢病院では、病院全体で音楽療法への認識を図り、組織的に音楽療法を行っていたことも浮き彫りとなった。

(2) 同時代に施行された音楽療法実践に関しては、「能動的音楽療法」及び「受動的音楽療法」の双方で、患者の文化土壌や趣味嗜好に合わせた楽器や楽曲が用いられていた。

すなわち、楽器としては、対象患者の意思を汲みながら、鍵盤楽器、弦楽器、吹奏楽器、打楽器など多種多様な和洋楽器が選択され、他方、楽曲については、同時代の流行楽曲も含め、新旧問わず多ジャンルのものが鑑賞された。その中でも、聴取時に患者の反応が特に強く示されると病院側が認識していた、三味線楽曲、浪曲、浄瑠璃に関しては、「受動的音楽療法」での使用頻度が非常に高いことも分かった。

ただし、「受動的音楽療法」として楽曲・演芸・映画などを鑑賞する際には、比較的明るい題材のものをを用いることを心掛け、顕著に刺激的な音色や歌詞、ストーリーが認めら

れるものに関しては、意図的に使用を避ける病院側の傾向も判明した。

さらに、昭和期に入ると病院内に蓄音機が数多く設置された。それにより、同時代における音楽療法実践の主要母体「教育治療部」の管轄による「教育治療所」でも、日常的に蓄音機での鑑賞機会が増加する傾向が認められた。

(3) 松沢病院を中心としながら、明治期から昭和戦前期にかけては、東京のみならず各地における精神病院でも音楽療法実践の場が、徐々に広がっていった。

そこで行われた音楽療法実践では、西洋の音楽療法理論を踏襲しながらも、一貫して日本独自の伝統的・文化的背景や患者の趣味嗜好を考慮しつつ、楽曲及び楽器の選定や鑑賞時のプログラム構成など、音楽療法実践に向けた理論確立への模索が積極的に行われていたことが明らかとなった。

上記3点の研究成果については、各種関連学会・研究会において、論文及び口頭発表・講演の形で公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

光平有希

「呉秀三の音楽療法とその思想的背景」『日本研究』査読有、第56集、国際日本文化研究センター、2017年、95-119頁。(オープンアクセス、DOI:10.15055/00006791)

〔学会発表〕(計6件)

光平有希

「明治期音楽療法の諸相」第18回日本音楽療法学会中国支部大会、2018年。(招待講演)

光平有希

「昭和戦前期松沢病院における『病者慰安』としての音楽療法—『教育治療』との関連を中心に—」日本音楽教育学会第48回大会、2017年。

光平有希

「明治後期における呉秀三の音楽療法理論とその思想的背景」国際日本文化研究センター「明治日本の比較文明的考察—その遺産の再考—」共同研究会、2017年。

光平有希

「近代日本における西洋音楽療法受容の勃興と展開—松沢（前：巢鴨）病院での音楽療法理論と実践を中心に—」国際日本文化研究センター「音と聴覚の文化史」共同研究会、2017年。

光平有希

「近代日本の音楽療法—東西知識交流の一側面」京都大学人文科学研究所「東西知識交流と自国化—汎アジア科学史論」研究会、2017年。

光平有希

「精神医療と音楽—再現演奏でたどる戦前期松沢病院の音楽療法—」日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（実社会対応プログラム）」採択事業「医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築」主催講演会、2017年。（招待講演）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

光平 有希 (MITSUHIRA, Yuki)

国際日本文化研究センター・研究部・機関
研究員

研究者番号：20778675

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()